

いわゆる血液型性格についての児童・青年の 自己評価からの一考察

藤 田 主 一* 岡 村 一 成** 外 島 裕***

AN EXAMINATION OF CHILDREN'S AND UNDERGRADUATES'S SELF-EVALUATIONS REGARDING THE RELATIONSHIP BETWEEN BLOOD TYPE AND PERSONALITY

Shuichi FUJITA*, Kazunari OKAMURA** and Yutaka TOSHIMA***

The theory that blood types as classified by the ABO system are related to a person's personality first appeared in Japan during the Taisho Era (1912-1926). Soon thereafter, in the beginning years of the Showa Era (1926-1988), Takeji Furukawa enthusiastically began research on the relationship between the two, the results of which were applied to the society of that day. Under the supposition that they would be little influenced by the prevailing notions held by denizens of the current society, Furukawa focused his research on school children ; thus, went the logic, ensuring the validity of the results.

The purpose of the present research was to apply the personality checklists by Furukawa for investigating the relationship between the blood types and personalities of upper-class primary-school-aged children and undergraduates. The children and undergraduates were presented with a questionnaire listing nineteen personality items representing the personality characteristics ascribed to children whose blood types are A, B, and O, and they were requested to give a self-evaluation as to whether or not each of these items were applicable to themselves.

The results showed that, overall, there was a strong tendency for the children to respond affirmatively regarding personality traits ascribed to persons of blood type B, and for the undergraduates to respond affirmatively regarding personality traits ascribed to persons of blood type A. Next, a factor analysis was performed, which revealed that the children and undergraduates could be classified by personality into three general categories. Moreover, no significant correlation between these three general traits and blood type were shown to exist. These results demonstrate that the relationship between the children's and the undergraduates's blood types and their personalities is non-existent.

* 城西大学女子短期大学部
Josai University Junior College for Women

** 富士短期大学
Fuji Junior College

*** 人材開発情報センター
Human Resources Development Service Corp.

「A B O式血液型と人間の性格とが関係しているという説は、偉大な錯覚である。」

この批判的論説を主張する大村(1990¹⁴⁾)は、日本の社会に流布してきたA B O式血液型と人間の性格とが関係するという考え方に対して、歴史的な展望と統計的な根拠に基づいて痛烈な反論を展開している。性格心理学の立場からのこの反論は、1984年に開かれた日本応用心理学会第51回大会における研究発表「血液型性格学は信頼できるか」(大村, 1984¹⁰⁾)に端を発し、その後の否定論、肯定論を巻き込みながら今日に至っている(溝口, 1986⁸⁾; 大村, 1986¹¹⁾, 1989¹³⁾, 1990¹⁴⁾, 1991¹⁵⁾, 1993¹⁶⁾; 大西, 1986¹⁷⁾; 松田, 1991⁷⁾; 佐藤・渡邊, 1992¹⁹⁾; 佐藤, 1993²⁰⁾など)。

A B O式血液型と人間の性格とを最初に関連づけたのは、原・小林(1916³⁾)である。原と小林がこの年の7月に『医事新聞』954号に載せた「血液ノ類属的構造ニ就テ」という論文は、それから以後の血液型と性格肯定説のルーツといえるだろう。彼らはこの論文の中で、A型者は従順で優秀、B型者は粗暴で低劣の傾向があると述べ、偶然性を主張しながらもその必然性を同時に示唆している。原・小林の論文から10年後の1926年7月に、当時の陸軍軍医であった平野・矢島(1926⁵⁾)が「人血球凝集反応ニ就テ」を『軍医団雑誌』157号に発表している。そこでは、軍隊内における兵卒の階級と血液型、懲罰者と血液型などのテーマで記述がなされ、例えば懲罰者にはB型者が最も多いといった内容である。大村が反駁するように、これらの論の展開はすべてにわたって目分量統計から出発したものであり、現代の推計学からは何の意味も持たない。従って、上記にあるようなB型者のイメージがどれほどの妥当性を持つものかを証明することはできない。

原・小林をはじめとして、人が持つさまざまな属性を血液型によって分類しようとする試みは、その後、紆余曲折をたどりながら今日に至るまで続くことになるが、心理学的なセンスを用いて人の行動と血液型とを関連づけたのは、古川竹二である。

古川は、自分の近親者の行動を観察したところ、同じ血液型の者同士が類似した気質を持っていることに気づいた。古川の観察では、O型者とB型者は能動的で、A型者は受動的であった。古川はこの事実を確認する目的で、質問紙調査法を用いて本格的

な研究に着手した。自分が所属する学校の生徒や卒業生、同僚や友人、血族などを次々と調査して行った。そして、当初の“能動的か受動的か”といった二分法(大村, 1986¹¹⁾)から血液型別の行動パターンを取り上げた四分法へと発展して行ったのである。古川の信念とも言える研究方向に対して、大村(1988¹²⁾)は古川学説の誤謬要因を以下の4点にまとめている。

(1) A B O式の血液型で気質が異なるという仮説が、血族という狭い範囲で立証されてしまったことである。

(2) 血液型別の行動パターンの記述が、ご都合主義の結論づけに陥ってしまったことである。

(3) 目分量統計ですべてを決定してしまったことである。昭和初期のこうした統計法が、偏狭な固執的思考(強烈な願望的思考)の入る余地を与えてしまった。

(4) 性格の二面性(性格の長所と短所)をうまく使って血液型と行動のパターンを接合させたことである。

しかし、大正から昭和初期にかけて血液型と気質とを関連づけた古川学説は、職業選択や結婚の相性決定に、強力な軍隊の構成に、優秀な国民の育成に、さまざまなところで応用されるようになって行った。そして、心理学や医学の学会を巻き込んだ古川の「血液型気質相関説」は、1927年に発表された『血液型による気質の研究』¹⁾(心理学研究)をスタートに、1932年に出版された『血液型と気質』²⁾という著書をピークに、以後、衰退の一途をたどって行くのである。

古川の生涯をかけた情熱的な研究は、古川の死後およそ30年を経た1970年代に、能見正比古によって奇妙な復活をすることになる。能見は、1971年の『血液型でわかる相性』⁹⁾をはじめとする数多くの著書を次々に出版し、A B O式血液型と性格とが豊かな関連性を持っている事実を標榜して行った。能見はマス・メディアに乗じて、古川が学術的に展開した理論を面白おかしく拡大コピーして行ったのである。大村(1991¹⁵⁾)は、古川に対する角度とは違った方向から、能見のいう「血液型人間学」が世俗的に浸透してきた誤謬を以下の3点にまとめている。

(1) 古川学説が持っている硬さを破って、非常にソフトな、訳のわからないものにしてしまったことである。

(2) 生物的女性は血の価値を認識し、その女性が持っているエロスの心情の中にウイルスのように侵入してきたことである。

(3) テレビ・新聞・週刊誌などを賑わしている膨大な数の有名人の血液型を収集したことである。その面白おかしい解説に加えて、それらの人びとと無名の女の子とを結びつけたことである。

大村の批判は止まるところを知らないが、科学としての心理学と、大衆に浸透しやすい心理学との狭間にあって、血液型人間学に対する心理学的な研究分野には、①古川学説の歴史的研究、②心理学の標準検査による各血液型者の研究、③血液型ステレオタイプを背負っている人々についての研究、④対人認知様式における血液型性格判断の研究、⑤日本における血液型性格判断ブームの研究などが考えられている。

例えば、第1の分野は溝口(1986⁸⁾)などの科学史的研究、大村(1990¹⁴⁾)などの心理学史的研究、松田(1991⁷⁾)の社会史的研究などに代表されるものである。第2の分野は長谷川(1985⁴⁾)が研究したように、心理学で標準化された性格検査を用いて、血液型四類型の性格を探ろうとするものである。長谷川は特にYG性格検査の性格特性と血液型との対応を試みたが、それらが各血液型と対応していないという知見を提出し、血液型と性格判断との関連性を否定している。第3の分野として詫摩・松井(1985²³⁾)の研究がある。詫摩・松井は、ABO式血液型によって性格が異なるという信念を「血液型ステレオタイプ」と呼び、そのような信念を持っている人は回帰性傾向、社会的外向性、親和欲求、追従欲求などが強いという結果を得ている。第4の分野の中で、坂元(1988¹⁸⁾)は血液型信仰を持つ人は認知的複雑性が単純で、性別・人種・民族についての偏見を持ちやすく、さらに、山崎・坂元(1991²⁴⁾)の研究では、自己評定によるB型の人の性格が年を経るに従って相対的にいわゆるB型的人間の性格に近づいているというのである。第5の分野は、血液型性格判断という社会現象を時代的推移という立場から、そのブームの衰退を静かに見つめて行く方法である。関西大学社会学部社会調査室の研究(1986⁶⁾)や佐藤・渡邊(1992¹⁹⁾)などがその中に入れられる。それ以外の、医学的・生理学的に純粋な血液研究の成果からのアプローチは、血液型と性格との関連性に新しい分野

を開いてくる。例えば、血液のABO型を決定する血液型物質は脳には存在しない。つまり、脳には血液・脳関門があって、血液成分は脳組織に入り込めないのである。“性格を決めているのは脳である”という前提に立てば、脳は自らの血液型を知らないのであるから、性格とはまったく無関係でしかありえないのである(高田, 1992²¹⁾)。

さて、本研究では上述した膨大な古川学説の中から、児童・青年を対象にした気質(性格)の自己認知を取り上げて心理学的に検討することが目的である。ここで、最初に児童を対象にしたのは、まず古川(1932²⁾)自身が著書『血液型と気質』の302～303ページに「父兄より見たる児童の気質表」という節題のもとで、「杜撰ながら、昭和2年始めて本研究を学術誌上に発表して以来、軍隊及び医学の方面に於て、其の応用研究が行われ、近時教育界に於ても、諸地方の真摯なる教育家及び校医の方々により、吾人の宿望たる教育上の利用の為に研究が続々行われつつあるので、父兄として見たる児童、生徒の気質に対する考察表を上に掲げて、諸賢の参考に供し度いと考え」と述べ、表1に示したような観察表を作成している点が挙げられる。

また、同著の325～326ページには小学児童の気質の調査に関連した具体例が記述されており、①気質の問題に興味を持つ両親兄弟たちが、その児童の気質に対して真実を供述すること、②児童の気質観察には、児童に合った観察表を作成し、これを用いて観察しなければならないことの2点を取り上げて、これらが小学児童の気質の研究について最も必要なことであるとまとめている。古川のこの指摘は、血液型と気質との対応の多くが個人の出生後相当年数が経ってからのものであり、これが研究の“ゆがみ”になるため、①児童の気質を熟知している者からの報告を重視すること、②児童自身の内省(自己認知)を尊重すること、③他者観察や内省に必要なリストを作成することなどを、特に児童の気質研究の背景にあると考えていたようである。

大村(1989¹³⁾)でも討論されたことであるが、血液型と気質(性格)との関連性を問題にすると、①その多くが発達的には青年期以降が中心であり、また男性以上に若い女性をねらったテーマ(相性、結婚など)を用いている、②青年期の自我の特徴である“見る、見られる自分”に関心を持ちはじめ自

分とは何かを問うときに、血液型の四類型はわかりやすく容易に結論が出せる、③古来から存在した四類型という分類方法は人間判断にマッチしており、自分自身を判断するときに四類型の中の1つとして理解しやすい、④青年期以前の人についても組織的に研究し、発達の観点から考察することが必要であるなどの諸点が考えられる。特に、本研究においては、第4の指摘を検討するとともに、合わせて青年の自己認知についても明らかにすることが目的である。すでに大村(1990¹⁴⁾)も「児童の場合、自省表に対する回答能力に大きな制限がある・・・(中略)・・・しかし、小学校5・6年生になると、内省(内観)する能力はかなり強化される。そのような年齢の子どもに古川の自省表を実施したとき・・・」と述べ、実際に児童自身に内省させてみる価値を示唆している。そこで、本研究は表1のリストを小学校高学年児童と大学生に自己評価させ、その結果を心理学的な方法を用いて分析し、古川の自省表に掲げられた血液型別項目の妥当性を検討しようと試みる。

研 究 I

【目 的】

古川竹二が提出した血液型別気質表に示された項目を、小学校高学年児童に自己評価させ、因子分析等を用いてその項目の持つ意味を検討する。

【方 法】

1. 被験者

神奈川県藤沢市内の公立小学校5年生、6年生の児童109名(男子36名、女子73名)である。また、血液型別ではA型者40名、B型者23名、O型者30名、

AB型者16名であった。なお、被験者109名の血液型別による人数分布は、日本人の出現頻度(A型者37.3%、B型者22.1%、O型者31.5%、AB型者9.1%—古畑種基による)から算出された理論頻数と比較して、有意な差ではなかった($\chi^2=.61$, $df=3$, n.s., 修正値)。

2. 調査材料

表1に示した古川のABO型児童気質表の“○○の子”という19項目(A型7項目、B型6項目、O型6項目、AB型なし)を横組みにしてランダムに並べ、それぞれの項目の先頭に()を付した新たな質問票を作成した。新たな質問票では、児童に読みやすくするために一部ひらがなに直している。また、質問票には載せていないが、後の集計の便を配慮して、それぞれの項目に血液型番号を配列した。それは、以下の通りである。

A型：A 1 やさしい子

A 2 おとなしい子

A 3 内気な、心配性の子

A 4 はずかしがりの子

A 5 人の言うことをよくきく子

A 6 しかられるとしよげてしまう子

A 7 人に頼りたがる子(甘える子)

B型：B 1 敏感な子

B 2 すぐ人に慣れる子

B 3 はずかしがりでない子

B 4 よく人と交わる子

B 5 世話好きな子

B 6 だまっていられない子

O型：O 1 しっかりした子(人に頼らない子)

O 2 勝気な子

表1 古川が児童用に作成した気質の観察表

AB	B	A	O
外面B型的デ、内面A型的ナ子	ダ マ マ ッ テ 居 ラ レ ナ イ 子 世 話 好 キ ナ 子 ヨ ク 人 ト 交 ル 子 ス グ 人 ニ 慣 レ ル 子 恥 シ ガ リ デ ナ イ 子	人 ニ 頼 リ タ ガ ル 子 (甘 ヘ ル 子) 叱 ラ レ ル ト 悄 気 デ シ マ ウ 子 人 ノ 言 フ コ ト ヲ ヨ ク キ ク 子 恥 シ ガ リ ノ 子 内 気 ナ 子 、 心 配 性 ノ 子 オ ト ナ シ イ 子 優 シ イ 子	物 ニ 動 ジ ナ イ 子 仲 間 ヲ 支 配 シ タ ガ ル 子 大 胆 ナ 子 勝 ッ カ リ シ タ 子 (人 ニ 頼 ラ ナ イ 子) シ ッ カ リ シ タ 子

- 3 大胆な子
- 4 仲間を支配したがる子
- 5 自分をなかなかまげない子
- 6 ものに動じない子

A B型：項目なし（外面B型的で、内面A型的な子）

3. 手続き

上記の児童に対して、概ね以下の教示が与えられた。

「用紙に並んでいる“○○の子”という言葉を読み、ふだんの自分のことを考えて、その通りの子どもだと思ったら（ ）の中に○印を書いてください。反対に、いや違うと思ったら（ ）の中に×印を書いてください。○印か×印のどちらかを書いて下さい。」

質問票にある“○○の子”という言葉の意味がわからない場合には、最小限度の範囲で簡単な説明を加えた。なお、データの収集にあたっては、すべて個別にて行われた。

【結果と考察】

1. 各項目への回答傾向

古川が提出した19項目に対して、児童が行った自己認知による回答傾向を表2に示す。表中の数値は、各項目ごとに肯定を1点、否定を0点として、その

表2 各項目への回答傾向

血液型気質項目	平均	SD
A1 やさしい子	.56	.50
A2 おとなしい子	.12	.33
A3 内気な、心配性の子	.46	.50
A4 はずかしがりの子	.34	.48
A5 人の言うことをよくきく子	.44	.50
A6 しかられるとしよげてしまう子	.43	.50
A7 人に頼りたがる子(甘える子)	.40	.49
B1 敏感な子	.51	.50
B2 すぐ人に慣れる子	.73	.44
B3 はずかしがりでない子	.50	.50
B4 よく人と交わる子	.82	.39
B5 世話好きな子	.67	.47
B6 だまっていられない子	.68	.47
O1 しっかりした子(人に頼らない子)	.41	.49
O2 勝気な子	.57	.50
O3 大胆な子	.47	.50
O4 仲間を支配したがる子	.30	.46
O5 自分をなかなかまげない子	.41	.49
O6 ものに動じない子	.44	.50
A型気質得点	.39	.22
B型気質得点	.65	.26
O型気質得点	.43	.25

平均値と標準偏差（SD）を示したものである。この値は、ある項目に全員が肯定した場合には平均値が1、全員が否定した場合には平均値が0ということになる。つまり、この値は.5より高くなれば肯定している者の人数が多いことを示す。さらに、A型気質得点はA型項目7項目の平均値、B型気質得点はB型項目6項目の平均値、O型気質得点はO型項目6項目の平均値をそれぞれ意味している。

肯定する傾向が高い項目には、

B4：「よく人と交わる子」(.82)

B2：「すぐ人に慣れる子」(.73)

B6：「だまっていられない子」(.68)

B5：「世話好きな子」(.67)

などを挙げることができる。

否定する傾向が高い項目には、

A2：「おとなしい子」(.12)

O4：「仲間を支配したがる子」(.30)

A4：「はずかしがりの子」(.34)

A7：「人に頼りたがる子(甘える子)」(.40)

などを挙げることができる。

A型気質得点は.39、B型気質得点は.65、O型気質得点は.43となり、B型項目を肯定する傾向が強い。表3は、血液型別にA、B、O各気質得点を示したものである。どの血液型においてもB型気質得点が高い傾向が見られた。気質得点に対する肯定傾向はB型項目に強いが、これはB型項目で捉えようとしている行動傾向が児童から見て望ましい特性なのかもしれない。つまり、各血液型項目に肯定、否定が分散するのではなく、特にB型項目に肯定が集まりやすいことから、古川の提出した気質項目は、その反応に偏りを持つ項目の配列であると理解できる。

2. 児童の血液型とA、B、O各気質得点との関係

次に、A型気質得点は血液型A型に対して他の血液型よりも有意に高い傾向が見られるか、同様にB型気質得点、O型気質得点ではどうかを検討した。即ち、従属変数を気質得点とし、独立変数を各血液型とする、1要因4水準の分散分析を行った。A型気質得点については表4、B型気質得点については表5、O型気質得点については表6に、それぞれの結果を示した。

A型気質得点において条件の要因は有意でなく、血液型に差は見られなかった [$F(3, 105) = .35, p > .1$]。同様に、B型気質得点 [$F(3, 105) = .14,$

表3 血液型と各気質得点の平均値(SD)

気質得点	A型	B型	O型	AB型
A型気質得点	.40 (.22)	.42 (.22)	.39 (.25)	.35 (.19)
B型気質得点	.63 (.23)	.67 (.25)	.66 (.28)	.67 (.29)
O型気質得点	.44 (.26)	.48 (.30)	.40 (.20)	.42 (.26)

表4 A型気質得点を従属変数とした分散分析表

要因	平方和	df	平均平方	F
条件	.053	3	.018	.35 n.s.
誤差	5.301	105	.050	
全体	5.354	108		

表5 B型気質得点を従属変数とした分散分析表

要因	平方和	df	平均平方	F
条件	.029	3	.010	.14 n.s.
誤差	7.034	105	.067	
全体	7.063	108		

表6 O型気質得点を従属変数とした分散分析表

要因	平方和	df	平均平方	F
条件	.087	3	.029	.44 n.s.
誤差	6.859	105	.065	
全体	6.946	108		

表7 児童気質項目の因子負荷行列

血液型による児童気質項目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	共通性
O3 大胆な子	0.67	-0.09	0.12	0.47
O2 勝気な子	0.64	-0.15	-0.16	0.46
B3 はずかしがりでない子	0.64	0.17	0.04	0.44
B4 よく人と交わる子	0.55	0.32	-0.06	0.41
B6 だまっていられない子	0.53	-0.00	0.13	0.30
B2 すぐ人に慣れる子	0.43	0.41	-0.19	0.38
A3 内気な、心配性の子	-0.44	0.16	0.41	0.39
A2 おとなしい子	-0.46	0.37	-0.01	0.35
A4 はずかしがりの子	-0.54	-0.08	0.11	0.31
A1 やさしい子	-0.03	0.76	-0.19	0.61
O1 しっかりした子(人に頼らない子)	0.29	0.51	-0.06	0.35
A5 人の言うことをよくきく子	-0.30	0.50	0.03	0.34
O6 ものに動じない子	0.19	0.23	0.10	0.10
O4 仲間を支配したがる子	0.00	-0.50	-0.22	0.30
A6 しかられるとしょげてしまう子	0.10	0.03	0.74	0.55
A7 人に頼りたがる子(甘える子)	-0.02	-0.21	0.69	0.52
B5 世話好きな子	0.26	0.07	0.31	0.17
B1 敏感な子	0.23	0.12	-0.34	0.18
O5 自分をなかなかまげない子	0.02	-0.11	-0.47	0.24
因子寄与	3.08	1.97	1.83	6.88

$p>.1$], O型気質得点 [F (3, 105) = .44, $p>.1$] においても、血液型との間に有意な関係は見出されなかった。

3. 19項目の構造と血液型との関係

児童気質項目の19項目に対する回答傾向に基づいて、19項目の内部相関行列を求め、主成分分解による因子分析を行った。固有値の減少の様子および因子の解釈を考慮して、3因子を抽出することとし、バリマックス回転を行った。表7に、この因子負荷行列を示す。回転後の因子の寄与率は、第Ⅰ因子で16.2%、第Ⅱ因子で10.4%、第Ⅲ因子で9.6%であり、これら3因子による累積寄与率は36.2%であった。

なお、主成分分解の特徴は「データ行列を説明するためには、たとえ1つの変数にしか関与しない因子でも抽出する。・・・ある変数のセットがどれだけの基本的因子を想定することで説明されるかが因子分析をする場合の関心なのであり、共通変動のみを抽出することにこだわる必要はない」(竹内・市川, 1987²²⁾)とされているものである。

第Ⅰ因子に負荷量の高い項目は、

O3: 「大胆な子」(.67)

O2: 「勝気な子」(.64)

B3: 「はずかしがりでない子」(.64)

B4: 「よく人と交わる子」(.55)

表8 血液型と各因子得点の平均値(SD)

因子得点	A型	B型	O型	AB型
第Ⅰ因子得点	-.01 (.92)	.02 (1.09)	-.08 (1.07)	.14 (1.01)
第Ⅱ因子得点	-.14 (1.03)	.30 (1.03)	.13 (.98)	-.33 (.82)
第Ⅲ因子得点	.10 (1.11)	-.09 (.90)	-.13 (.95)	.13 (1.00)

表9 第Ⅰ因子得点を従属変数とした分散分析表

要因	平方和	df	平均平方	F
条件	.508	3	.169	.17 n.s.
誤差	107.492	105	1.024	
全体	108.000	108		

表10 第Ⅱ因子得点を従属変数とした分散分析表

要因	平方和	df	平均平方	F
条件	5.028	3	1.676	1.71 n.s.
誤差	102.972	105	.981	
全体	108.000	108		

表11 第Ⅲ因子得点を従属変数とした分散分析表

要因	平方和	df	平均平方	F
条件	1.390	3	.463	.46 n.s.
誤差	106.610	105	1.015	
全体	108.000	108		

などであり、人との交流に積極的な姿勢を持つ“社交性”を表している因子と推測することにした。

第Ⅱ因子に負荷量の高い項目は、

A1:「やさしい子」(.76)

O1:「しっかりした子(人に頼らない子)」(.51)

A5:「人の言うことをよくきく子」(.50)

などであり、“優等生的なよい子”を表している因子と解釈することにした。

第Ⅲ因子に負荷量の高い項目は、

A6:「しかられるとしょげてしまう子」(.73)

A7:「人に頼りたがる子(甘える子)」(.69)

B5:「世話好きな子」(.31)

などが属しており、“情緒的な子”を表している因子と推測した。

さらに、ここで抽出された児童気質項目の3つの因子と、血液型との関係を検討した。表8に、各血液型別の3つの因子得点を示した。これを基に、因子得点を従属変数、各血液型を独立変数とした1要

因4水準の分散分析を行った。第Ⅰ因子得点については表9、第Ⅱ因子得点については表10、第Ⅲ因子得点については表11に、それぞれの結果を示す。

第Ⅰ因子得点と各血液型との関係に有意な差は見られなかった [$F(3, 105) = .17, p > .1$]。同様に、第Ⅱ因子得点においても有意な差はなく [$F(3, 105) = .71, p > .1$]、第Ⅲ因子得点においても有意な傾向は見られなかった [$F(3, 105) = .46, p > .1$]。

研究Ⅱ

【目的】

研究Ⅰにおいて、古川竹二が提出した血液型別気質表の項目を小学校高学年児童に自己評価させたが、ABO式の血液型で回答方向に差が認められなかった。そこで、研究Ⅱでは、児童に存在しなかった関係が青年にも認められるかについて検討しようと試みた。

【方法】

1. 被験者

東京都および埼玉県内の大学生が被験者である。調査は2種類の被験者群について行われた。調査Ⅰは441名(男子281名、女子160名)が参加した。血液型別では、A型者175名、B型者94名、O型者133名、AB型者39名で、被験者群の血液型別による人数分布は、日本人の出現頻度(研究Ⅰを参照)から算出された理論頻度と比較して有意な差ではなかった($\chi^2 = .98, df = 3, n.s.$)。調査Ⅱは443名(男子220名、女子223名)が参加した。血液型別では、A型者153名、B型者101名、O型者142名、AB型者47名で、調査Ⅰと同様、被験者群の人数分布に有意な差はなかった($\chi^2 = 2.22, df = 3, n.s.$)。

2. 手続き

調査材料は、研究Ⅰと同様に古川のABO型児童気質表に示された項目を用いた。その際、気質表の中の“〇〇の子”の部分を“〇〇の人”に改め、各項目の先頭に()を付してランダムに並べた質問票を作成した。「自分のことを考えて、その通りの人だと思ったら()の中に○印を、反対に違うと思ったら×印を書いてください」という指示も、児童に与えた内容と同じであった。なお、2回の調査とも通常の授業時間中に行った。

表12 各項目への回答傾向

血液型気質項目	百分率
A1 やさしい人	75.9
A2 おとなしい人	43.6
A3 内気な、心配性の人	56.9
A4 はずかしがりの人	65.5
A5 人の言うことをよくきく人	60.9
A6 しかられるとしよげてしまう人	45.0
A7 人に頼りたがる人(甘える人)	52.2
B1 敏感な人	60.5
B2 すぐ人に慣れる人	54.4
B3 はずかしがりでない人	29.3
B4 よく人と交わる人	57.6
B5 世話好きな人	50.4
B6 だまっていられない人	41.4
O1 しっかりした人(人に頼らない人)	36.7
O2 勝気な人	52.6
O3 大胆な人	26.1
O4 仲間を支配したがる人	19.3
O5 自分をなかなかまげない人	52.2
O6 ものに動じない人	39.4
A型気質得点	56.8
B型気質得点	48.5
O型気質得点	37.6

【結果と考察】

集計にあたっては、各項目ごとに肯定を1点、否定を0点として換算した。また、基本的な処理方法は研究Ⅰに準拠した。なお、すべてにおいて性差はなかった。

1. 調査Ⅰについて

表12は、19項目の血液型別気質項目への回答結果を示したものである。441名の大学生全員が肯定する傾向の高い項目には、

A1：「やさしい人」(.76)

A4：「はずかしがりの人」(.66)

A5：「人の言うことをよくきく人」(.61)

B1：「敏感な人」(.60)

などを挙げることができる。

否定する傾向が高い項目には、

O4：「仲間を支配したがる人」(.19)

O3：「大胆な人」(.26)

B3：「はずかしがりでない人」(.29)

O1：「しっかりした人(人に頼らない人)」(.37)

などを挙げることができる。

A型気質得点の平均値は.57、B型気質得点は.48、O型気質得点は.38となり、A型項目を肯定する傾向が強い。表13は、血液型別にA、B、O各気質得点の平均値を示したものである。どの血液型においてもA型気質得点が高い傾向が認められた。児童では

表13 血液型と各気質得点の平均値(SD)

気質得点	A型	B型	O型	AB型
A型気質得点	.57 (.28)	.60 (.28)	.51 (.24)	.66 (.27)
B型気質得点	.49 (.28)	.46 (.27)	.51 (.26)	.42 (.27)
O型気質得点	.38 (.24)	.37 (.27)	.39 (.25)	.33 (.22)

表14 A型気質得点を従属変数とした分散分析表

要因	平方和	df	平均平方	F
条件	.764	3	.255	3.64**
誤差	30.535	437	.070	
全体	31.299	440		** $p < .01$

表15 B型気質得点を従属変数とした分散分析表

要因	平方和	df	平均平方	F
条件	.328	3	.109	1.50 n.s.
誤差	31.850	434	.073	
全体	32.178	437		

表16 O型気質得点を従属変数とした分散分析表

要因	平方和	df	平均平方	F
条件	.102	3	.034	.55 n.s.
誤差	27.166	438	.062	
全体	27.268	441		

B型項目への選択が高かったのに対して、大学生は児童と異なる捉え方をしている。A型で捉えようとしている行動傾向は、大学生からみて望ましい項目と考えられた。気質得点の中でもO型気質得点への選択が最も低いことから、大学生においても気質表項目への選択が均等でないことが分かる。

次に、ABO各気質得点がそれぞれの血液型に対して、他の血液型よりも有意に高い傾向が見られるかどうかを検討するために、1要因4水準の分散分析を行った。A型気質得点については表14、B型気質得点については表15、O型気質得点については表16にそれぞれの結果を示したが、A型気質得点において5%水準でA型>O型の関係が認められた。即ち、A型気質得点にA型が関与せずに、AB型がO型よりも有意に高い選択をした。

19項目に対する回答傾向に基づいて、反復主因子法・バリマックス回転を行い、3因子を抽出した。表17にその因子負荷行列を示した。

表17 大学生における血液型項目の因子負荷行列(調査Ⅰ)

血液型による気質項目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	共通性
A4 はずかしがりの人	0.83	-0.22	-0.05	0.73
A3 内気な、心配性の人	0.51	-0.33	0.18	0.40
A7 人に頼りたがる人(甘える人)	0.43	0.06	0.04	0.19
A6 しかられるとしよげてしまう人	0.41	0.01	0.19	0.20
O1 しっかりした人(人に頼らない人)	-0.18	-0.01	0.17	0.06
O6 ものに動じない人	-0.24	0.04	-0.04	0.06
B3 はずかしがりでない人	-0.68	0.20	0.12	0.52
B4 よく人と交わる人	-0.24	0.60	0.28	0.50
B6 だまっていられない人	-0.01	0.53	-0.09	0.29
B2 すぐ人に慣れる人	-0.23	0.51	0.29	0.40
O2 勝気な人	-0.11	0.38	-0.31	0.25
O3 大胆な人	-0.23	0.32	-0.12	0.17
O4 仲間を支配したがる人	0.02	0.22	0.00	0.05
B1 敏感な人	0.02	0.19	-0.04	0.04
A2 おとなしい人	0.25	-0.53	0.20	0.39
A5 人の言うことをよくきく人	0.13	-0.10	0.48	0.26
A1 やさしい人	-0.09	-0.05	0.46	0.22
B5 世話好きな人	0.09	0.19	0.38	0.19
O5 自分をなかなかまげない人	-0.10	0.14	-0.34	0.14
因子 寄与	2.13	1.79	1.14	5.06

第Ⅰ因子に負荷量の高い項目は、

A4 : 「はずかしがりの人」(.83)

A3 : 「内気な、心配性の人」(.51)

A7 : 「人に頼りたがる人(甘える人)」(.43)
 などであり、“内向性”を表している因子と解釈した。

第Ⅱ因子に負荷量の高い項目は、

B4 : 「よく人と交わる人」(.60)

B6 : 「だまっていられない人」(.53)

B2 : 「すぐ人に慣れる人」(.51)

などであり、“外向性”を表している因子と解釈した。

第Ⅲ因子に負荷量の高い項目は、

A5 : 「人の言うことをよくきく人」(.48)

A1 : 「やさしい人」(.46)

B5 : 「世話好きな人」(.38)

などであり、“よい子”を表している因子と解釈した。

さらに、ここで抽出された3因子と血液型との関係を検討した。表18に、各血液型別の3つの因子得点を示した。これを基に、因子得点を従属変数、各血液型を独立変数とした1要因4水準の分散分析を行った。その結果、第Ⅰ因子得点 [$F(3, 434) = .60$, n.s.] ならびに第Ⅲ因子得点 [$F(3, 434) = .22$, n.s.] と各血液型との関係に有意差は見られなかったが、第Ⅱ因子得点 [$F(3, 434) = 2.96$, $p < .05$] において5%水準でO型>AB型との関係が見られた。これは、O型の人がAB型の人よりも、自分のことを外向性であると判断していることを示している。

表18 血液型と各因子得点の平均値(SD)

因子得点	A型	B型	O型	AB型
第Ⅰ因子得点	-.02 (.90)	.03 (.90)	-.08 (.86)	.11 (.91)
第Ⅱ因子得点	-.01 (.84)	-.09 (.85)	.15 (.79)	-.24 (.80)
第Ⅲ因子得点	-.02 (.80)	.03 (.71)	-.02 (.80)	.08 (.81)

2. 調査Ⅱについて

古川が提出した血液型別気質項目は、小学校高学年児童の各結果に有意差が存在しなかったが、大学生(調査Ⅰ)においてA型気質得点と第Ⅱ因子の因子得点に有意差が認められ、項目による安定性に問題があった。調査Ⅱは、この点を再確認する目的で再度のデータを収集したものである。

調査Ⅱに参加した443名の大学生が、19項目の血液型別気質項目へ回答した結果を集計すると、全員が肯定する傾向の高い項目には、

A1 : 「やさしい人」(.80)

A4 : 「はずかしがりの人」(.70)

B1 : 「敏感な人」(.65)

A3 : 「内気な、心配性の人」(.62)

などを挙げるができる。

否定する傾向が高い項目には、

O4 : 「仲間を支配したがる人」(.17)

O3 : 「大胆な人」(.24)

表19 血液型と各気質得点の平均値(SD)

気質得点	A型	B型	O型	AB型
A型気質得点	.62 (.26)	.60 (.25)	.58 (.26)	.67 (.29)
B型気質得点	.44 (.27)	.48 (.26)	.48 (.27)	.47 (.25)
O型気質得点	.33 (.24)	.38 (.25)	.41 (.26)	.28 (.23)

表21 B型気質得点を従属変数とした分散分析表

要 因	平方和	df	平均平方	F
条 件	.145	3	.048	.69 n.s.
誤 差	30.301	433	.070	
全 体	30.446	436		

表20 A型気質得点を従属変数とした分散分析表

要 因	平方和	df	平均平方	F
条 件	.181	3	.060	.89 n.s.
誤 差	29.124	431	.068	
全 体	29.305	434		

表22 O型気質得点を従属変数とした分散分析表

要 因	平方和	df	平均平方	F
条 件	.772	3	.257	4.21**
誤 差	26.415	432	.061	
全 体	27.187	435		** $p < .01$

表23 大学生における血液型項目の因子負荷行列(調査Ⅱ)

血液型による気質項目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	共通性
B2 すぐ人に慣れる人	0.58	-0.15	0.12	0.37
B4 よく人と交わる人	0.51	-0.13	0.12	0.29
B6 だまっていられない人	0.48	0.10	0.18	0.27
O3 大胆な人	0.44	-0.20	0.12	0.24
A5 人の言うことをよくきく人	-0.21	0.01	-0.01	0.04
A2 おとなしい人	-0.62	0.15	-0.07	0.41
A4 はずかしがりの人	-0.47	0.63	0.18	0.65
A7 人に頼りたがる人(甘える人)	0.12	0.57	-0.35	0.46
A3 内気な、心配性の人	-0.40	0.54	0.04	0.46
A6 しかられるとしゃべってしまう人	-0.11	0.44	-0.01	0.20
O6 ものに動じない人	0.02	-0.50	0.12	0.27
B3 はずかしがりでない人	0.48	-0.53	-0.13	0.53
O1 しっかりした人(人に頼らない人)	0.02	-0.34	0.39	0.27
O2 勝気な人	0.30	-0.18	0.38	0.27
O5 自分をなかなかまげない人	0.07	-0.11	0.37	0.16
B1 敏感な人	0.04	-0.01	0.32	0.10
O4 仲間を支配したがる人	0.15	0.11	0.32	0.13
B5 世話好きな人	0.12	0.04	0.31	0.11
A1 やさしい人	-0.07	-0.03	0.14	0.02
因 子 寄 与	2.22	2.02	1.02	5.26

B3：「はずかしがりでない人」(.37)

O6：「ものに動じない人」(.37)

などを挙げることができる。

A型気質得点の平均値は.61、B型気質得点は.47、O型気質得点は.36となり、調査Ⅰ、調査Ⅱともに類似した平均値を取ること、大学生はリストに並べてある項目を選択する場合、A型項目を肯定する傾向が強いことが分かった。表19は、血液型別にA、B、O各気質得点の平均値を示したものである。どの血液型においてもA型気質得点が高い傾向が認められた。各気質得点の平均値では、調査Ⅰと同様に児童と異なる捉え方をしている。対象が異なる大学生のサンプルにおいても、A型項目で捉えようとしてい

る行動傾向は、大学生からみて望ましい項目と考えられた。また、気質得点の中でO型気質得点への選択が最も低いことも明らかになった。

次に、ABO各気質得点とそれぞれの血液型との関係を検討するために、1要因4水準の分散分析を行った。A型気質得点については表20、B型気質得点については表21、O型気質得点については表22にそれぞれの結果を示したが、O型気質得点〔F(3, 432) = 4.21, $p < .01$ 〕において1%水準でO型 > A型、O型 > AB型の関係が認められた。古川は、O型者とB型者は能動的であり、A型者とAB型者は受動的であると理論化するが、O型気質項目にO型者が有意に高く選択したことは、古川のいう理論が正

しいとすれば理解できるものである。

表23は、19項目に対する回答傾向に基づいて、反復主因子法・バリマックス回転を行い3因子を抽出した結果である。

第Ⅰ因子に負荷量の高い項目は、

B 2 : 「すぐ人に慣れる人」(.58)

B 4 : 「よく人と交わる人」(.51)

B 6 : 「だまっていられない人」(.48)

などであり、“社交性”を表している因子と解釈した。

第Ⅱ因子に負荷量の高い項目は、

A 4 : 「はずかしがりの人」(.63)

A 7 : 「人に頼りたがる人(甘える人)」(.57)

A 3 : 「内気な、心配性の人」(.54)

などであり、“内向性”を表している因子と解釈した。

第Ⅲ因子に負荷量の高い項目は、

O 1 : 「しっかりした人(人に頼らない人)」(.39)

O 2 : 「勝気な人」(.38)

O 5 : 「自分をなかなかまげない人」(.37)

表24 血液型と各因子得点の平均値(SD)

因子得点	A型	B型	O型	AB型
第Ⅰ因子得点	-.12 (.85)	.10 (.91)	.07 (.83)	-.00 (.83)
第Ⅱ因子得点	.02 (.83)	-.01 (.79)	-.06 (.90)	.14 (.95)
第Ⅲ因子得点	-.02 (.73)	-.02 (.77)	-.10 (.82)	-.18 (.65)

表25 各項目への回答傾向

血液型気質項目	百分率
A1 やさしい人	78.0
A2 おとなしい人	45.3
A3 内気な、心配性の人	59.3
A4 はずかしがりの人	67.9
A5 人の言うことをよくきく人	59.1
A6 しかられるとしよげてしまう人	49.7
A7 人に頼りたがる人(甘える人)	56.5
B1 敏感な人	62.9
B2 すぐ人に慣れる人	50.2
B3 はずかしがりでない人	27.8
B4 よく人と交わる人	55.6
B5 世話好きな人	50.3
B6 だまっていられない人	39.7
O1 しっかりした人(人に頼らない人)	41.8
O2 勝気な人	49.3
O3 大胆な人	25.0
O4 仲間を支配したがる人	17.9
O5 自分をなかなかまげない人	49.6
O6 ものに動じない人	38.4
A型気質得点	59.1
B型気質得点	47.5
O型気質得点	36.9

などであり、“独立性”を表している因子と解釈した。

各血液型別の3つの因子得点を表24に示した。これを基に、因子得点を従属変数、各血液型を独立変数とした1要因4水準の分散分析を行ったが、第Ⅰ因子 [F (3, 428) = 1.77, $p > .1$], 第Ⅱ因子 [F (3, 428) = .64, $p > .1$], 第Ⅲ因子 [F (3, 428) = 1.73, $p > .1$] とともに血液型による有意差は見られなかった。

3. 大学生全体(調査Ⅰ+調査Ⅱ)について

最後に、全大学生884名(調査Ⅰ+調査Ⅱ)の結果をまとめることにする。まず、血液型気質項目への回答(百分率)を表25に示した。肯定する傾向の高い項目には、

A 1 : 「やさしい人」(.78)

A 4 : 「はずかしがりの人」(.68)

B 1 : 「敏感な人」(.63)

A 3 : 「内気な、心配性の人」(.59)

などを挙げることができる。

否定する傾向が高い項目には、

O 4 : 「仲間を支配したがる人」(.18)

O 3 : 「大胆な人」(.25)

B 3 : 「はずかしがりでない人」(.28)

O 6 : 「ものに動じない人」(.38)

などを挙げることができる。

A型気質得点の平均値は.59, B型気質得点は.48, O型気質得点は.37となり、大学生はA型項目を肯定することが分かった。表26は、血液型別に気質得点の平均値を示したものである。気質得点の平均値から、項目を選択する場合、大学生は児童の選択基準と異なる捉え方をしており、古川の提出した血液型による気質項目はその妥当性が崩れる結果となった。

次に、気質得点とそれぞれの血液型との関係を検討するために、1要因4水準の分散分析を行った。A型気質得点については表27, B型気質得点については表28, O型気質得点については表29にそれぞれの結果を示したが、A型気質得点においてA B型 > O型 [F (3, 872) = 3.69, $p < .05$], O型気質得点において同じくO型 > A B型 [F (3, 872) = 3.44, $p < .05$] という有意な関係が認められた。

19項目に対する回答傾向に基づいて、反復主因子法・バリマックス回転を行い、3因子を抽出した結果を表30に示した。

第Ⅰ因子に負荷量の高い項目は、

表26 全大学生における血液型と各気質得点の平均値(SD)

気質得点	A型	B型	O型	AB型
A型気質得点	.60 (.27)	.60 (.26)	.57 (.25)	.66 (.28)
B型気質得点	.47 (.27)	.46 (.27)	.50 (.27)	.45 (.26)
O型気質得点	.36 (.24)	.38 (.26)	.40 (.26)	.30 (.23)

表28 B型気質得点を従属変数とした分散分析表

要 因	平方和	df	平均平方	F
条 件	.208	3	.069	.97 n.s.
誤 差	62.499	875	.071	
全 体	62.707	878		

表27 A型気質得点を従属変数とした分散分析表

要 因	平方和	df	平均平方	F
条 件	.767	3	.256	3.69*
誤 差	60.326	872	.069	
全 体	61.093	875		* $p < .05$

表29 O型気質得点を従属変数とした分散分析表

要 因	平方和	df	平均平方	F
条 件	.636	3	.212	3.44*
誤 差	53.857	874	.062	
全 体	54.493	877		* $p < .05$

表30 大学生における血液型項目の因子負荷行列(調査Ⅰ+調査Ⅱ)

血液型による気質項目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	共通性
A4 はずかしがりの人	0.75	-0.25	-0.04	0.63
A3 内気な、心配性の人	0.56	-0.29	0.18	0.44
A7 人に頼りたがる人(甘える人)	0.45	0.05	0.01	0.21
A6 しかられるとしよげてしまう人	0.44	-0.01	0.13	0.21
O1 しっかりした人(人に頼らない人)	-0.26	0.03	0.23	0.12
O6 ものに動じない人	-0.37	0.01	-0.05	0.14
B3 はずかしがりでない人	-0.65	0.25	0.10	0.50
B4 よく人と交わる人	-0.21	0.58	0.24	0.45
B2 すぐ人に慣れる人	-0.23	0.56	0.20	0.40
B6 だまっていられない人	-0.00	0.52	-0.12	0.29
O3 大胆な人	-0.26	0.35	-0.10	0.20
O2 勝気な人	-0.19	0.34	-0.22	0.20
O4 仲間を支配したがる人	0.03	0.23	-0.01	0.05
B1 敏感な人	-0.00	0.15	-0.02	0.02
A2 おとなしい人	0.25	-0.55	0.20	0.40
A5 人の言うことをよくきく人	0.08	-0.14	0.49	0.26
A1 やさしい人	-0.05	-0.03	0.45	0.21
B5 世話好きな人	0.06	0.22	0.33	0.16
O5 自分をなかなかまげない人	-0.12	0.13	-0.24	0.09
因 子 寄 与	2.20	1.84	0.93	4.97

A4: 「はずかしがりの人」(.75)

A3: 「内気な、心配性の人」(.56)

A7: 「人に頼りたがる人(甘える人)」(.45)

などであり、“内向性”を表している因子と解釈した。

第Ⅱ因子に負荷量の高い項目は、

B4: 「よく人と交わる人」(.58)

B2: 「すぐ人に慣れる人」(.56)

B6: 「だまっていられない人」(.52)

などであり、“社交性”を表している因子と解釈した。

第Ⅲ因子に負荷量の高い項目は、

A5: 「人の言うことをよくきく人」(.49)

A1: 「やさしい人」(.45)

B5: 「世話好きな人」(.33)

などであり、“社会的よい子”を表している因子と解釈した。

各血液型別の3因子の因子得点を表31に示した。これを基に、因子得点を従属変数、各血液型を独立変数とした1要因4水準の分散分析を行った。第Ⅰ因子については表32、第Ⅱ因子については表33、第Ⅲ因子については表34に、それぞれの結果を示した。

第Ⅰ因子得点 [F (3, 866) = 1.16, $p > .1$] ならびに第Ⅲ因子得点 [F (3, 866) = .50, $p > .1$] と各血液型との関係に有意な差は見られなかった。第Ⅱ因子得点では5%水準で、O型>A型 [F (3, 866) = 3.12, $p < .05$] という関係が認められた。即ち、“社交性”を表している因子においては、O型がA型よ

表31 血液型と各因子得点の平均値(SD)

因子得点	A型	B型	O型	AB型
第Ⅰ因子得点	.02 (.86)	.00 (.96)	-.07 (.87)	.12 (.93)
第Ⅱ因子得点	-.07 (.84)	.00 (.84)	.12 (.81)	-.12 (.77)
第Ⅲ因子得点	-.01 (.77)	-.00 (.70)	-.02 (.75)	.09 (.75)

表32 第Ⅰ因子得点を従属変数とした分散分析表

要 因	平方和	df	平均平方	F
条 件	2.619	3	.873	1.16 n.s.
誤 差	651.980	866	.753	
全 体	654.599	869		

表33 第Ⅱ因子得点を従属変数とした分散分析表

要 因	平方和	df	平均平方	F
条 件	6.353	3	2.118	3.12*
誤 差	588.693	866	.680	
全 体	595.046	869		* $p < .05$

表34 第Ⅲ因子得点を従属変数とした分散分析表

要 因	平方和	df	平均平方	F
条 件	.832	3	.277	.50 n.s.
誤 差	484.446	866	.559	
全 体	485.278	869		

表35 本研究で得られた結果の一覧表

指 標	児童(N=109)	大学生(調査Ⅰ=441)	大学生(調査Ⅱ=443)	大学生(N=884)
肯定する項目	よく人と交わる子	やさしい人	やさしい人	やさしい人
否定する項目	おとなしい子	仲間を支配したがる人	仲間を支配したがる人	仲間を支配したがる人
高い気質得点	B型気質得点	A型気質得点	A型気質得点	A型気質得点
低い気質得点	A型気質得点	O型気質得点	O型気質得点	O型気質得点
気質得点×血液型	n.s.	A型気質(AB型>O型)	O型気質(O型>A型) (O型>AB型)	A型気質(AB型>O型) O型気質(O型>AB型)
因子名	I 社交性 Ⅱ 優等生的なよい子 Ⅲ 情緒的な子	I 内向性 Ⅱ 外向性 Ⅲ よい子	I 社交性 Ⅱ 内向性 Ⅲ 独立性	I 内向性 Ⅱ 社交性 Ⅲ 社会的なよい子
因子得点×血液型	n.s.	Ⅱ O型>AB型	n.s.	Ⅱ O型>A型
性差	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

りも自分を社交的な人と認知していることが明らかになった。

結 論

本研究は、昭和初期に古川竹二が心理学的なセンスを用いて、情熱的な研究に着手したA B O式血液型と気質との関連性を、新たな視点から検討しようと試みたものである。古川は大著『血液型と気質』²⁾の中で、“参考に”と断りながらも父兄から見た血液型による児童の気質表を掲載している。そこでは、古川自身の観察によるものだが、A B Oの各血液型を持つ児童に共通して認められる行動様式が列挙され、これがおそらく今日、広く浸透している「血液型性格判断」の1つのルーツになっているものと思われる。表1に示された血液型別気質の観察表では、

A B Oの各血液型行動様式は記述されているが、A B型は“外面B型的で、内面A型的な子”という表現にとどまり、これも今日、A B型がマイナスイメージに捉えられている根源であるといえよう。

さて、古川が提出した気質表を小学校高学年児童109名と大学生884名(441名、443名)に自己評価させ、血液型別に分けて掲げてある項目に妥当性があるか、即ち、自己評価に血液型による一貫性があるかを検討した。表35は、本研究で得られた結果を一覧表にしたものである。

児童が自己評価した気質項目への選択によると、“よく人と交わる子”に代表されるB型気質項目への得点が高い。反対に、“おとなしい子”に代表されるA型気質項目への得点が高い。実際にはA型の児童が多いが、B型気質得点が高い値を示したことから、古川の気質項目は血液型を弁別するものではないと

推測される。つまり、古川の気質項目は、古川自身が主張するような固定化したものとは異なり、現代の児童の観点と当時の児童観との間にズレが生じているので、今日から見れば項目相互の関連性において、項目自体が平等に作成されていると考えられない。小学校高学年になると、自己を客観的に捉える自我が形成し始める。他者との関係の中で、明るく、人づき合いのよい自分でありたいという意識が強調されてくると思われる。そこで、リストに掲げてある項目をチェックする時に、自分や他者の理想とするところ（社会的に望ましい反応）を追い求める傾向にあったのではないだろうか。古川が作成した当時の“よい子”と現代の“よい子”とは同一の次元ではない。今日、問題にされている血液型性格判断は、当時の一般的な児童観を現代児童の行動様式（血液型項目）に拡大して用いられているのではないかと考えられる。従って、古川の気質項目は、血液型との関連性を示すのではなく、3つの因子（社交性、よい子、情緒性）を内在している項目であると結論づけられる。

大学生に対して同様の方法で自己評価させたのは、児童の自己評価との比較を目的にするためである。表35から、大学生において3つの観点から考察が可能である。第1に、血液型気質得点の高低が児童のそれと異なる点である。つまり、A型気質得点は血液型のA型で高くなく、B型気質得点でもB型で高いのではない。O型気質得点において、O型とAB型で差が生じたというだけである。古川のA型気質項目やB型気質項目が、それぞれの血液型を想定したり、当てはめるための項目でないことは明らかである。第2に、肯定、否定する項目の違いである。先に、児童は積極的に他者との関係を求める子どもを肯定すると述べたが、大学生はいつの場合にも、“やさしさ”の提供を最も好ましく、“仲間を支配する”態度を最も好ましくないと考えている。これは、血液型による選択というよりも、社会的な価値観からの選択であろう。大学生は自己イメージを形成するプロセスの中で、血液型と〇〇といった情報に基づく機会が多いと思われるが、それでも選択項目に不思議な一致が見られるのは、血液型との関連性ではないことを物語っている。

第3に、因子分析の結果、児童と同様に3因子が抽出され、それらの因子は基本的に“内向性、外向

性、よい子”で説明できる。ABO型の項目がきれいに3因子に分布していないことから、ここでも古川の気質項目への回答は、血液型で決まらないことが理解できると思われる。ただ、因子得点と血液型との関係の中で、“外向性（社交性）”因子においてO型がA型、AB型より有意に外向的であった。古川は、O型とB型はactive、A型とAB型はpassiveであると述べている。この二分法に今回の大学生のデータが関係していたのは興味深いが、その結果に妥当性があるかどうかの詳細は、今後の研究に待ちたいところである。

仮に、血液型と気質（性格）との間に関連性があるのであれば、大学生に実施した異なる2種類の調査間においても高い一貫性が見られるはずである。しかし、本研究の中で詳述したように、気質得点と血液型、因子得点と血液型、3因子の寄与で違いが存在したことから、共通した「血液型と気質（性格）」という関連性は見出せないのではないだろうか。古川が情熱をかけて研究した血液型と気質との相関説は、本研究による分析で、その関連性に乏しいと結論づけてよいのではないかとと思われる。

文 献

- 1) 古川竹二：血液型による気質の研究．心理学研究，2，612-634.
- 2) 古川竹二：血液型と気質．三省堂，1932.
- 3) 原 来復・小林 栄：血液ノ類属的構造ニ就テ．医事新聞，1916，No.954，937-941.
- 4) 長谷川芳典：「血液型と性格」についての非科学的俗説を否定する．日本教育心理学会第27回総会発表論文集，1985，422-423.
- 5) 平野 林・矢島登美太：人血球凝集反応ニ就テ．軍医団雑誌，1926，No.157.
- 6) 関西大学社会学部社会調査室：＜血液型ブーム＞研究－人間関係ゲームの流行を探る．社会調査報告書，1986.
- 7) 松田 薫：「血液型と性格」の社会史．河出書房新社，1991.
- 8) 溝口 元：古川竹二と血液型気質相関説－学説の登場とその社会的受容を中心として－．生物科学，1986，38，9-20.
- 9) 能見正比古：血液型でわかる相性．青春出版社，1971.
- 10) 大村政男：「血液型性格学」は信頼できるか．日本応用心理学会第51回大会発表論文集，1984，23.
- 11) 大村政男：血液型気質説の回顧と展望．日本大学心

- 理学研究, 1986, 7, 27-42.
- 12) 大村政男: 血液型気質説についての研究. 日本大学人文科学研究所研究紀要, 1988, 35, 175-199.
 - 13) 大村政男: 血液型気質相関説の批判的研究. 日本大学人文科学研究所研究紀要, 1989, 38, 53-77.
 - 14) 大村政男: 血液型と性格. 福村出版, 1990.
 - 15) 大村政男: 「血液型気質相関説」と「血液型人間学」の心理学的研究—古川竹二教授生誕百年を記念する—. 日本大学人文科学研究所研究紀要, 1991, 42, 71-92.
 - 16) 大村政男: 「血液型気質相関説」と「血液型人間学」の心理学的研究Ⅱ. 日本大学人文科学研究所研究紀要, 1993, 46, 115-155.
 - 17) 大西赤人: 「血液型」の迷路. 朝日新聞社, 1986.
 - 18) 坂元 章: 対人認知様式の個人差とA B O式性格判断に関する信念—いわゆる「血液型性格判断」を否定する(1)—. 日本社会心理学会第29回大会発表論文集, 1988, 52-53.
 - 19) 佐藤達哉・渡邊芳之: 現代の血液型性格判断ブームとその心理学的研究. 心理学評論, 1992, 35, 2, 234-268.
 - 20) 佐藤達哉: 血液型性格相関説についての検討. 社会心理学研究, 1993, 8, 3, 197-208.
 - 21) 高田明和: 血液の不思議Part2—血液型性格判断からボケ予防まで—. 講談社ブルーバックスB-927, 1992.
 - 22) 竹内 啓・市川伸一: SASによるデータ解析入門. 東京大学出版会, 1987.
 - 23) 詫摩武俊・松井 豊: 血液型ステレオタイプについて. 東京都立大学人文学報, 1985, 172, 15-30.
 - 24) 山崎賢治・坂元 章: 血液型ステレオタイプによる自己成就現象. 日本社会心理学会第32回大会発表論文集, 1991, 288-291.
-